

マーヴェルの選挙区への書簡 (4) 1670年-1671年

山 口 孝 道

はじめに

I. 背景

II. 開会

III. 課税審議

IV. 宗教問題

V. 議員傷害問題

VI. 私信の世界の選挙区への報告

VII. 閉会

結 び

はじめに

商業都市キングストン・アボン・ハル (Kingston upon Hull, 以下, ハルと略記) 市選出の庶民院議員として, 詩人アンドルー・マーヴェル (Andrew Marvell, 1621-78) が市当局に書き送った議会報告を中心とする一連の書簡 (1660-78) を追っているが, 1668年2月から70年4月の部分を検討した前稿⁽¹⁾に続き, 今回は70年10月から71年4月に及んだ会期の報告を紹介する。この期間は71年2月に召集されたいわゆる騎士議会第9会期の後半に当り⁽²⁾, 第3次英蘭戦争 (1672-74) 前の最後の議会でもあって, 次に開かれたのは開戦してほぼ1年後の73年2月のことであった。他方, マーヴェルの書簡も, この会期後, 2回の会期や政変をはさんで, 3年近く中断され (議会には恐らく出席)⁽³⁾, 再開されるのは戦争も末期となった74年1月のことであった⁽⁴⁾。つまり, この会期の報告で, マーヴェルの書簡は一区切りとなっている。

最近、マーヴェル書簡集の邦訳が刊行されたことを特記しておく⁽⁵⁾。座右に置いて、絶えず参考にさせていただいている。ただし、引用訳文は必ずしも同じではない。また今回から、テキストを前記訳書と同じオクスフォード版第2巻に変える。利用を許可された愛知教育大学附属図書館、仲介の労をとられた富山大学附属図書館の関係者に厚くお礼を申しあげる。

引用の仕方は、従来同様、まず発信日を記す。70. 6. 5は1670年6月5日である。さらにセミコロンのあと出所ページを記す⁽⁶⁾。

I. 背景

1670年4月に休会となった議会は同年10月24日に再開され、翌年4月22日まで続いた。騎士議会第9会期の後半である。またカバル政権にとっては、事前工作のあと、本格的に取組んだ最初の議会でもあった。

マーヴェルの議会報告を検討する前に、当時のマーヴェルの心境、また議会に臨む国王および政府の立場を一瞥しておく。

マーヴェルは70年の春、すでに政界の状況について、すこぶる批判的、悲観的であった⁽⁷⁾。すなわち、私信において、王権はノルマン征服以来、絶対的に強力であり、かつ議会も官職も同じような気質の輩によって占められていると述べ(70. 3. 21; 315)、さらに

「いかなる政治的陰謀が、この休会期に、進行しているものやら、わかったものではありません」(70. 4. 14; 317)

と懸念している。マーヴェルはその根拠として、治安判事が一斉に更迭されつつあることを指摘している(同所)。ところが、それに続けて、国王の愛妹オルレアン公妃の里帰りを伝え、それは「疑いもなく家族会議」のためとして、さまざまな憶測を紹介しているが(同所)、実はこの「里帰り」こそ、英仏間の秘密交渉の仕上げのためであったとは、さすがマーヴェルも洞察できなかったようである。

当時、外交は大権事項に属し、国王の独壇場であったが⁽⁸⁾、国王はそれを

利して、秘密裡に外交政策の転換を進めていた。

国王の公式的な外交方針とは、68年2月、議会で表明したように、従来の行き掛りを捨て、フランスの侵略政策に備えて、オランダと同盟（のち、スウェーデンも参加）関係を維持しようとするものであり、この同盟の責務を果たすため、艦隊の強化が必要であるとして、議会にその予算措置を求め、議会もこれに応じたことは前稿でみた通りである⁽⁹⁾。

三国同盟の成果はたちまちあらわれた。おりからフランスは相続権を口実にフランドル地方（スペイン領）侵攻中であつたが、これを中止せざるを得なかつた（エクス・ラ・シャペル条約）。しかしフランスの対応は素早く、三国同盟を崩すべく、直ちに誘いの手をイギリス国王にのばした。これにはイギリス国王お気に入りの妹オルレアン公妃が大きな役割を果たした。両者の間に暗号文が行き交い、やがてイギリス国王のごくわずかな側近も交渉に加わつた。三国同盟の推進者、国務卿アーリントンもそのひとりであつたが、69年末には原案が固まり、70年5月、ルイ14世の代理としてのオルレアン公妃の「里帰り」を機に調印された。ドーヴァの密約である。秘密は完全にまもられた。カバルのうち、調印に参加したのは前記アーリントンのほかクリフォードのみであつた。イギリスにおけるカトリック教徒の解放、オランダに対し、同時にイギリス・フランス両国が開戦すること、そしてイギリスにフランスから200万リーヴルを提供するという諸点が盛りこまれていた⁽¹⁰⁾。交渉はさらに進展し、72年春を期して開戦することとなり、カトリック問題を除いた案文にカバル全員が署名したのは70年12月のことで、おりから開会中のイギリス議会はクリスマス休暇であつた。三国同盟がフランスの侵略行動に対抗するという予防的、受動的なものであるのに比し、これは攻撃的、具体的なものであつた。72年3月、急襲を受けて、さすがオランダの老練な実力者デ・ウィットもなす術がなかつたが、それはまさに「秘密主義の勝利⁽¹¹⁾」とも言われている。さて、イギリス国王は議会に公表した外交政策とまったく相反する方針を遂行するために議会を召集したわけである。このチャールズ2世に、数年間、側近として侍したこ

とのあるハリファックスはチャールズの最大の特長として「そらとばけ」(dis-simulation)をあげている⁽¹²⁾が、この場合、それ以上の謀略であると言わねばなるまい。その点、当時イギリス政界において、かれに勝る人物はいなかったと思われる。この国王の意を体して最も活躍したのがトマス・クリフォード(Clifford, T., 1630-73)であった。かれは前記のようにドーヴァの密約の署名者であり、議会工作では前稿で触れたように“bribe-master-general”として知られていた、カバル⁽¹³⁾第一の働き手であった。

国内でもう一点、見逃せないことがあった。前稿で述べたように、この会期の前半、第2次集会法が成立し、非国教徒にたいする取締りが一段と強められたが、逆に非国教徒はこれに反発し、ロンドンを中心として、各地で抵抗を示し、そのため弾圧を招いていた⁽¹⁴⁾。ハルでも活発な働きがみられたが、市当局はむしろ好意的であった⁽¹⁵⁾。政府側はもちろん取締りを続けていたが、他方、国王がその利用価値に着目したふしがあり、議会の審議にもその影の及んだことがマーヴェルの書簡から窺われる。いずれにせよ、国王の求めた予算について、宗教問題もこの会期の話題となった。

II. 開 会

第9会期後半は、70年10月24日に開かれ、クリスマス休暇をはさみながら、翌年4月22日まで続いた。この間のマーヴェルの書簡は39通である。

マーヴェルは開会翌日、早くも通信を始めたが、その第1報は、議会に臨んだ国王・政府側の態度を鮮やかに伝えているので紹介しておこう。

開会当日、慣例によって国王および国璽尚書の演説があった。従来、マーヴェルは、これについては、印刷物を同封して、報告を省略することが多かったが、今回は国王側の演説が印刷されるのは疑わしいとして(70. 10. 25; 110)、詳細にその内容を伝えたものである。果たせるかな、次の11月1日の便では、それらの印刷が禁じられたことを報じ、代りに筆写したものを送ることになろうと述べている(111)。

さて、国王および国璽尚書の演説だが、マーヴェルの報告というフィルターを通してのことであるが、かなりの高姿勢で議会に臨んだようである。前記のように、マーヴェルは私信において、国王がノルマン征服以来の専制的態度を示していると述べた事があったが、国王・政府側の態度はその延長線上にあったと言えそうである。

マーヴェルの伝えるところでは、政府側の演説要旨は、来春には大型船50隻を武装する必要があるので、その予算として80万ポンドを調達せよ、さらにそれ以外に、従来の国王名義の債務全額の支払を要求する。これらについてクリスマスまでに審議を完了せよ、というものであった(110)。新たな軍事費を要求する根拠として、フランスが海陸の軍勢力を著しく増強し、オランダもこれに対抗して緊張が高まっているが、イギリス国王は三国同盟の一員として

「キリスト教圏の平和のために応分の貢献をすべき義務がある」(109)、また、各国との貿易・通商についても

「陛下は臣民の利益のために多大かつ特別の配慮をなさる方針である。」(110)、

「要するにキリスト教圏のすべての君主は、目下のところ、陛下にたいし、かれらの安全の保証をというわけではないが、陛下のご好意を求め、それなくしては、かれら諸国の事態改善もおぼつかないありさまである。万事をご検討の上で、わが国は任務遂行の点で欠けることがあってはならないというのが陛下のご意向である」(同所)。

つまりイギリス国王はキリスト教世界の平和の擁護者であり、あるいはルイ14世の侵略政策に反対する一方の旗頭であるという立場を誇示したと言えるだろう。

このような演説にたいし、議会がどのような反応を示したのか、それは次の報告で伝えられた。1週間後の11月1日(火曜)の書簡によると、先週木曜、国璽尚書の演説がくり返されたが、議会は一議にも及ばず、求められた必要経費を提供することを決議している(111)。

「陛下のご要望に応ずることが、議会の感謝の念を表明するための、最善かつ最高の方法である」(同所)

との見解が議会を制したと言う。

2年前、三国同盟の結成はフランスの侵略政策を阻止するものとして歓迎されたが⁽¹⁶⁾、それ以来、国際情勢には大きな変化はなかった。したがって三国同盟を強化して、平和を擁護するための資金提供を、議会在討論ぬきで承認したのも異とするに足りない。ただし、国王の債務については、議会は財政当局にたいし明細の提出を求め、その検討を始めた、マーヴェルは伝える(同所)。挫折したとは言え、決算委員会を成立させた意識は健在であったと言えようか。

以上、開会当初の2便によって、この会期の主要課題が臨時課税の審議であることが明白となった。以下、その審議の経過を追って行こう。

Ⅲ. 課税審議

審議の様子が具体的に伝えられるのは11月8日づけの第3便(112-13)からである。

課税については、まずビール類への消費税が票決され、それ以外にもさまざまな提案があったが、まだ混乱状態である。すべての人の財産に20分の1の課税をするとか、土地税も消費税も止むを得まいという声もあると伝えながら

「陛下の切実なご期待に応えようとする熱意も、進んでそうしようという雰囲気もあります。しかしながら提供する金額についても、まだはっきり決ったわけではなく、その時期、方法についても具体的な決定はみておりません。」

(113)

これがこの便の結論である。最低80万ポンドの巨額⁽¹⁷⁾、開会してまだ2週間、当然のことだろう。

ところで、この第3便には通常の報告のほか、2点注目すべきことがある。そのひとつは、「有能で、それにふさわしく信頼されている」某議員の課税についての提案を、かなり詳細に伝えていることである(112-13)。その提案は

一応見送られたが、マーヴェルの取り上げ方は、名を伏せていることも含め、いわくありげである。かれはすでに利権臭を感じていたようである。

もう一点注目されるのは、この便のしめくりに、かれの手紙を

「多くの人の目 (many inspectors) にさらさないでください」(113)

と求めていることである。率直で、気取らない点が、かえって誤解を招く恐れもある、というのが、その理由である。自己の書簡に、官憲を含めて、多くの目が光っていることを自覚していたに違いない⁽¹⁸⁾。かれの要請は、取りも直さず、自戒であったはずである。この会期の書簡には、以前しばしばもらった批判的な口吻は乏しい。議事の経過を簡単に報告するだけである。その筆致はむしろマーヴェルの緊張を示すものと言うべきである。

第4便に到って、ようやく審議が軌道に乗ったことが伝えられる。まず課税対象として輸入商品が選ばれている。

「全員委員会は、連日、外国商品への課税について審議しています」(70.

11. 15 ; 114)

という書出しで

「植民地産の煙草には3ペンス」(同所)

以下、産地、品目、課税額が列挙されるが、おのずから、当時のイングランドの輸入商圏と多様な品目が示されている。

1日おいての11月17日づけの書簡の主たる内容はハル市固有の件であるが、やはり、その後の審議状況を伝え、さらにサー・R : Hの提案はご破算になったようだと告げている(115)。11月8日づけの「某議員」のことで、その徴税請負のもくろみが頓挫したというわけである。課税審議にこのような利権漁りが絡んで来る—それが政府の付け目でもあった—ことにマーヴェルは警戒をせざるを得なかった。この書簡は次の言で結ばれている。

「わたしにとって、目下、気掛かりなことはビールの内国消費税や外国商品への関税の追加のほかに、徴税のため、他の一層厳しい方法へと、わたしたちが舞い戻って来るのではあるまいか、ということです。」(同所)

やはり、マーヴェルは選良であった。

簡略な11月26日の書簡(118)では、外国商品への消費税(excise)案が委員会ですとまったことを伝えと共に、今回は氏名を明記して、サー・R. ハワードたちが、結局、利権を獲得したことも報じている。

3日後、外国商品への課税の委員会案が、ほぼ無修正のまま、本会議に提出されることになったと報じ、その他、輸入馬や外国製の大型四輪車や衣類にも高額、高率の税が課されること、またフランス製の珍品、装身具にも特別に課税するはずと伝え、それらは

「近頃、ひどくはやっておりますが、このような課税の結果、禁止同然となったとしても差支えないことでしょう。」(70. 11. 29; 119)

言うまでもなく、宮廷を取巻く上流階級の風俗の批判である。

12月3日づけの書簡も審議が継続中と伝える。追加の課税が必至の状態だが、土地税については152-109で除外と決定し、逆に、聖職禄兼有については特認のため10ポンド払うべきことを票決したとも報ずる(119)。しかし、次の12月8日づけでは聖職禄兼有にかんする課税は完全に削除されたと、議事の逆転を伝える⁽¹⁹⁾。教会側のまき返しがあったのだろうか。なお、この便では集会法強化案が委員会に付記されたことも述べている。この8日づけでは、ワインについての減税の請願を委員会が審議中であることも報じ、さらに新たな課税の対象として、あらゆる訴訟行為が浮びあがっていることをも伝える(120)。

続く12月10日の書簡は中間のまとめとも言える。これまで候補とされて来たビール類への追加消費税、外国商品への消費税、そしてすべての司法手続きへの課税、この3種の税収見込みについて、長い討議の末、採決した結果、せいぜい年額40万ポンドとの見積りがそれ以上を予測した者を抑えたと報じ、これは増税派の勝利を意味するにつけ加える(121)。開会直後、臨時課税が異議なく決議されたと伝えたが、ここで初めて、反対派、少なくとも消極派の存在が明らかにされた。この日、国王はホワイトホールにおいて庶民院議員にたいし、フランス軍の動向を口実に、80万ポンド調達 of 早期実現を督促した。マーヴェ

ルによれば、土地税抜きでの80万ポンドの調達は、再度、確認済みとされる。ただし、その票決は、最初128-112、2回目は124-111とある。政府側の工作にもかかわらず、相当勢力が国王、政府に非協力であったことが推測される。

しかし、いずれにせよ、税収見込みはまだ目標の半分に達したばかりである。そこでおのずから課税についての発想の転換が余儀なくされたようである。次の12月15日の短信(122)が、それを伝える。まず、前便で除外とされたばかりの土地のみならず、新たに現金、預金、在庫品、役職からの所得までもが課税の対象とされた。税制史上

「この決定は、ステレオタイプと化した旧式の臨時課税を転覆させようとするものであり、税制の基本的な再編成を必至とするものであった⁽²⁰⁾」。

と言われる。

忙中に閑あり、12. 15の手紙は「エールをありがとうございます」という言葉で結ばれている。

1日おいての17日の報告では、税務委員は国王が指名し、かれら及び関係役員全員が宣誓しなければならぬという決定を盛り込んだ法案が整ったことを伝えている(122)。

12月20づけ(123)はクリスマス休暇を告げているが、既述のワイン関税撤廃の請願を国王が嘉納したことも伝えている。また休会あけの点呼に欠席した議員には課税率を2倍にするという警告が出されたことも報じている。

休暇あけの1月5日の書簡は、80万ポンドの法案の審議が始まった⁽²¹⁾ことを伝える。そして議員の出席のよくないことに触れ

「もし、議場が一杯になれば、すべての法案で、多くの点が好ましい、穏健な(moderated)ものになって行くことでしょう」(124)

と述べる。つまりマーヴェルは臨時課税について、この段階では、消極派であった。

始まったばかりの課税法案の審議が、一時中断されることになった。それを報ずるのは次の1月10日の書簡である。休暇中、議員にたいする傷害事件があ

り、それが議会で取上げられ、これについての善後策を講ずることが最優先とされたからである、この件は後述に譲る。

課税法案の審議は1週間後に再開されるが、1月24日の報告(128)では、ビールとエール輸出のための法案が貴族院に送られ、同時に同院で停滞している外国産ブランディ禁止法案の審議促進を申し入れたと伝える。外国商品への課税同様、国王の要求に応えるための課税が重商主義の立場から進められていることは明白である。他方、土地にたいする課税をポンド当り8ペンスから12ペンスへと修正することが124-114で可決され⁽²²⁾、各種鉱山についての課税も票決されたと伝える。この書簡は次の文章で結ばれる。

「税務委員についての宣誓条項が削除されましたから、かれらは一層有益に自由裁量権を行使して、国民の負担の軽減をはかることになりましょう。」

(128)

増税のため中央集権化を進めようとする宮廷派と、それに抵抗する在野派の攻防の一端を示すものである。

1週間後の1月31日の書簡では課税審議はほとんど進行していないとしながらも

「課税法案について、最近、最も注目すべきことは、委員宣誓の件は削除されましたが、査定係の宣誓は存続と票決されたことです」(129)

と宮廷派の反撃を伝えている。

3通の書簡をはさんで、2週間後の2月16日の書簡は、さすがに、追加予算の法案が作成されたことを報ずる(132)。また欠席議員にたいし、臨時課税を倍額にするという条項は115-98で否決されたと伝える(同所)、投票数は議員総数の半分にも及ばない。塩税、法文書税、ビール類への追加課税、外国商品への消費税、これらの審議には、まだ2・3カ月を要するだろうとも推測している(同所)。

上記4税のうち、まずビール類への追加税の件が決着する。2月28日の書簡(133)は、原案より税額が低められ、6年間の時限課税となったことを報じ、

同時にこの税収は国王の債務の支払いに当るべきという条文が、長い討議のあと、71-62で否決されたとも伝える。また貴族院に送った追加予算案が若干修正されて戻って来たこともあげている。しかし、次の3月4日の書簡は、この件につき両院の合意が成立したと報じている(134)。ビール類への消費税は国王の裁可を待つばかりとも言っている(同所)。続いて外国商品への法案に取り組んでいるが、これは消費税としてではなく、以前の追加関税と同種のものとして処理する方針であると伝える(同所)。やはり議会にとり消費税は好ましいものではなかった。恐らくオランダをさして

「イーストランドの商品にも考慮すること」

にしたと言う、

「それは自国の船によって非常に有利に輸入され、わが国の海運に打撃を与えております」(同所)。

同盟国とは言え、オランダは貿易上、やはりライバルであった。

3月7日づけは、慌しく、案件処理の進展を伝える。臨時課税法案、ビール類への消費税法案が国王の裁可を得たとある。また懸案であったヨーク公のワイン販売許可権⁽²³⁾についての補償問題も解決したことも報じ、新たに輸入煙草についての課税法案が委員会を通過したことも伝える(134)。

すでに述べたように、この会期の課税審議には重商主義の色彩が濃いが、3月11日の報告でも同様である。塩にたいする関税について、その輸入がイギリス船によるか、外国船によるかで、軽重をつけ、また国内産は無税である。麦類の輸出では輸出商人に奨励金を与える案が提示されていることを伝える(135)。石炭の輸入についても同様の措置が示され、さらにブランディ輸入を厳しく規制する条項が盛り込まれていることも報告される(71. 3. 16; 136)。もっともこの件については、1週間後、長い但書きをつけて、再度、委員会審議をすることになった(71. 3. 23; 136-37)。この書簡では、他に、外国商品に関する法案が成文化されたことを伝えると共に、既報の石炭、穀物の輸出奨励の趣旨はそのままだが、穀物についてはイギリス船だけが、交付金

(allowance) を受けることになったと告げ、これに関し

「輸出について、何回も長い討論を重ねた結果、わが国の海運を奨励することの方が、土地所有者を激励することよりも、意義があるとされたわけです。」

(136)

とコメントしている。これは珍しいことである。この書簡中、論評を加えたり、私見を交えることは自制していたからである。また従来、両院間の対立については、比較的詳細に伝えていたが、庶民院内の意見対立に関しては、単に票決の結果を伝えるにすぎなかったからである。

3月下旬、庶民院の対立に触れたマーヴェルは4月に入って、貴族院・庶民院の間の暗い雲行きを伝える。庶民院から外国商品に対する課税案を受理した貴族院は

「これについて多くの重大な変更を加え、ことにブランディにかんする条文全体を削除したことは、両院間の議事手続きに反しております。」(71. 4. 6 ; 138)

と述べる。

次の報告は、大詰めに近づいている課税問題についての庶民院の雰囲気をよく伝えている(71. 4. 13 ; 138-39)。

まず、国王がオランダの甥オレンジ公⁽²⁴⁾ (the Prince of Orange) に債務を負っていることに議会が配慮していること。次に前記のビールへの追加税の件と同様であるが、臨時課税(subsidy)以外の他の税収はすべて国王の債務返済にあてるべしとの条文を加えるよう動議が出され、否決されたものの、口頭で、その旨を国王に申し入れることになったと伝える。財政乱脈についての議会の不信感を示すものであろう。第3は前便以来の貴族院との対立の件である。外国商品課税案について貴族院は多くの修正案をつけて送り返して来たが、庶民院はこれにたいして

「庶民院が承認した課税について変更を加えてはならない」

旨、厳粛に決議したと伝え(139)、両院の態度をみると、この法案が流れる恐

れもあると予想している。

しかし反面、両院間で意見が一致した点もあった。両院合意の上で、国王が外国製品を身につけないように、さらに宮廷においては男女を問わず、それらを着用する者は冷遇されるべきであるという建白を呈することになったと伝えられている。外国製品とはもちろんフランス製品を意味するものだろう。前記70. 11. 19づけの便において、フランスからの珍奇なものには重税を課して、禁止同様にすべきだという見解と軌を一にするものである。国産品愛用という重商主義の一側面を示すと共に、当時のイギリス政界における反フランス感情を反映したものである。

次の4月18日の便では、課税権限についての両院間の対立が深刻になって来たことを伝え、さらに、近く閉会の噂もあると報じているが、事実、続く4月22日の報告では、閉会を伝え、外国商品への課税案が廃案となったことを確認している。

ところで、今回の課税審議には利権漁りが絡んでいたことにマーヴェルは着目していたが、かれはその経過を追い、一味が思惑通り、それにありつけたことを伝え、それを推進した議員の氏名も明らかにしている（70. 11. 26:118）。それはかつての在野派の闘士のひとりであった。これに関する報告は前後3回にすぎないが、マーヴェルのまなざしの厳しさを感じさせずにはおかない。

IV. 宗教問題

この会期の主要案件が、臨時課税であったことは言うまでもないが、その経過を報ずるマーヴェルの書簡のなかに点綴されていた宗教問題を無視することはできない。しかもこれが、幾分か、課税審議とかかわっていたように思われる。

国王の開会演説にたいし、議会は慣例通り、謝辞を呈したが、そのなかには新しい集会法の励行の件も含まれていた（70. 11. 8, 112）。しかし、以前、マーヴェルが私信のなかで、「専制的悪意の結晶」と呼んだ（70. 3. 21; 314）

この法こそは、既述のように、各地で紛争を引き起していた。この問題が議会で取上げられたことをマーヴェルが報ずるのは開会して1月後のことであった。それによると、ロンドンの事件での逮捕・拘禁につき議会在審議し、また集会法そのものの欠陥を調査するための委員会が設けられたことも伝える(70. 11. 22; 117-18)。数日後マーヴェルはこの迫害の犠牲者に恩赦(Grace)が期待できるとも報せる(70. 11. 26; 118)。宮廷と非国教徒の間になんらかの接触があったに違いない。しかし、恩赦の件はこれだけでとぎれ、集会法審議の様子が伝えられる。それによると、より強硬な改正案が提出されていた。その案では集会参加者は

「暴徒とされ、5シリングの罰金を払うことができない者、あるいは氏名や住所を黙秘する者は矯正勞役所で、その分、労働することになる。さらに、治安官は、日中、差押え令状により、家屋に押し入ることができる」(70. 12. 8; 120)

というぐあいである。ところが、この審議についての報告が3カ月中断されている間に、審議の状況が一変してしまう。

集会参加者を「暴徒とする条項は破棄され、また、その他の条項も緩められ、最も重要なこととして残っているのは、法の執行に行過ぎがあった場合の免責の件だけです。ただし、これについても、余計に差押えた分を返還しなかったとか、罰金を自分のポケットに入れたままにしたとかの場合は適用外となります。」(71. 3. 23; 137)

審議の状況の変化についてはなんらの説明もない、議事が混乱した様子もない、ただ水面下の動きを想像するほかはない。なお、この3月23日づけの書簡は、すでに述べた海運派の地主派にたいする勝利を報じたものでもあり、審議に一定の方向性のあったことが窺われる。マーヴェルが楽観的になるのもふしぎではない。秋以来とだえていた恩赦の話題も復活する。

「わたしたちは、毎日、陛下から全国に恩赦法のご沙汰のあるのを待っております、これは大いに歓迎されることでしょうし、準備もできています。」

(71. 4. 13 ; 139) けれども、それがはかない期待にすぎなかったことが、僅か5日後の書簡で告げられる。「恩赦法の見込みは心細くなりました、なにしろ、わたしどもは課税金全額を承認したわけではありませんから。」(71. 4. 18 ; 140)

政府と非国教徒擁護派議員の間にある種の黙契のあったことを裏付けることである⁽²⁵⁾。そして言うまでもなく、国王から恩赦の意向表明のないまま、議会は閉会となった。集會法改定も審議未了となった⁽²⁶⁾。

ところで、この会期の宗教問題は非国教徒問題だけではなかった。新たに旧教徒(Popery)の動向が警戒されるようになって来た。イギリスではエリザベス朝以来、反カトリックの空気が強かったが、王制復古期にはそれが薄らぎ⁽²⁷⁾、クラレンドン法典の成立が示すように宗教的反感はむしろ非国教徒に向けられていた。その事情はマーズェルの書簡にも反映し、宗教問題については非国教徒対策が中心であった。この会期においても、まず話題とされたのは非国教徒問題であったが、この件が一時とぎれた2月上旬、俄かにカトリック問題が取上げられ、以後1月半、非国教徒問題以上ひんばんに報告されることとなった。

三国同盟が歓迎されたことが示すように、大国フランスの動向がイギリス政界の関心事となって来ており、課税審議においても反フランス感情が顕著であったのは、すでに見た通りである。一方、1669年来、ルイ14世がユグノオを圧迫し、カトリック化政策を推進したことから⁽²⁸⁾、イギリスではあらためて、国内のカトリックの動きに目を配るようになる⁽²⁹⁾。71年2月7日付けのマーズェルの書簡では、旧教徒が増大しつつあるという苦情が議会に寄せられ、それを受けて、実情を調査する委員会を発足させ、さらにその委員会は対策法案を提出することになったと伝える(130)。

この問題についてのマーズェルの報告をまとめると、議会の取組みは、当面、旧教徒にたいする現行法規の勵行を要望する両院合同の上申書を国王に提出すると共に、他方、新しい立法措置を講ずるという2点になる。後者については、

法案が貴族院に送付された旨3月11日付けの書簡が伝えている(135)。また前者に関しても両院の意見調整が速やかに進み、予定通り、上申書が提出されたと次の便で伝える。しかしそれによると、国王は取締りの布告を出すことは約束したものの、教育があったり、功績のあった者に対してはそれなりの敬意を払わねばならないと、自説を展開したようである(71. 3. 16; 136)。国王自身、カトリックに近く、王弟ヨーク公、議会工作の推進者クリフォード、つまり側近にカトリックが少なくなかった。布告も議会对策上のゼスチュアにすぎないともみられる⁽³⁰⁾。

以上のように、集会法案、カトリック取締り法案の審議は順調に進み、さらに4月13日の書簡が表明しているように恩赦への期待も高まって来たが、数日後、一転して、閉会の噂が流れ、両法案、さらに恩赦法も水泡に帰すだろうとの予想が伝えられ(71. 4. 18; 140)、事実、4月22づけの書簡で閉会を伝えることとなった(140-41)。以上がこの会期における宗教問題審議の結果である。

V. 議員傷害事件

従来のマーヴェルの書簡でも伝えられたことであるが、議会の審議が思いがけない突発事故のため、中断されたり、混乱したりすることがある。この会期も、マーヴェルの言う「アクシデント」(71. 1. 24, 321)によって審議が一時中断された。それは議会での発言が原因となり、休会中、議員が暴行・傷害を受けた事件であった。これが議会で問題となったのはもちろん休会明けのことで、事件発生後3週間も経っており、マーヴェルは周知のこととしてか、報告では事件の内容を省略している。しかしここでは、行文の必要上、それについて具体的に述べている彼の私信を借りて、まず事件を略記しておく。

70年12月19日、一議員より劇場への課税の提案があった。そのやりとりのなかでこの議員は国王の逸楽を揶揄する発言を口にした。この発言を不快として、国王は翌日から休会にすると、マーヴェルは推測する。さて休会となった20日

の深夜、帰宅途上の同議員を数十名の兵士が襲い、暴行のあげく、鼻をそぎ落して、逃走した。調べによって、兵士たちが国王の庶子モンマス公の配下に属し、現場のリーダー格は貴族の子弟であったことも判明した。マーヴェルは私信において、事件について以上のような説明をしている（71. 1. 24 ; 321-22）。

さて、71年1月10日の報告（125）によると、この事件は休会明けの点呼をきっかけとして議会で取上げられた。まず事件担当の治安判事が現職議員でもあったので、同議員から直ちに「事件についての申し分のない説明」があった（私信もこれに基づくものであろう）。そこで議会は犯人に出頭を命じ、かつ今後の対策についての法案を作成し、これが庶民院を通過するまで、課税問題を含め、他の審議はすべて棚上げされることとなった。4日間の集中審議の結果、議員保護のため、会期中の議員への加害者には、ことに重罪を課するという法案が成立し、貴族院に送られた（71. 1. 14 ; 126）。宮廷派といえども、この審議を妨害することはできなかったようである⁽³¹⁾。

しかし、貴族院は庶民院案に重大な修正を加えて、送り返して来た。変更されたのは、犯人は2月16日までに出現すべしとする庶民院案（71. 1. 12 ; 126）に対し、この法案が国王の裁可を得て、貴族院議事録に記載されてから25日後とすること、及び、会期中の議員保護についての条文を完全に削除することの2点（71. 2. 4 ; 130）であり、要するに骨抜き同然の修正案となった。当然、両院協議会が開かれたが、マーヴェルはその結果を報告していない。ただし、庶民院案では犯人出現の日限とした、その2月16日付けの書簡では、3月10日をさして

「犯人の出現すべき日限と法に定められた日」（132）

と述べていることから、少なくとも日限では庶民院は貴族院に押し切られた形で、法が成立したことになる。貴族院が犯人の出現期日を引延したことは犯人の逃亡幫助の疑惑も残るが⁽³²⁾、貴族院のみならず国王にも犯人を庇う行為のあったことを、この書簡は伝えている。だが、事件についてのマーヴェルの報

告には熱意が感じられず、議員として軽視できない事件であったはずであるが、マーヴェルは挿話程度にしか扱っていないという印象である。事件の報告は、近く裁判が始まるという予告(71. 3. 11; 135)を最後に打切られている。もはや議会の手を離れ、司直の手に委ねられたということだろう。

Ⅵ. 私信の世界と議会報告

以上、ハル市当局にあてたマーヴェルの議会報告を、臨時課税、宗教問題、議員傷害問題の3点に整理して、紹介したが、この時期、僅か数便ではあるが、この議会報告とはかなりニュアンスの異なる政界通信のあったことは、前期と同様である。そこで、議会報告を念頭に置きながら、私信による政界情報を一瞥してみたい。

この時期の私信の1号は、在外の甥⁽³³⁾にあてたものだが(70. 11. 28; 317-18)、これはまず、議会再開前の、集合法にたいする非国教徒の抵抗と、それへの官憲の弾圧に触れ、さらに次のような注目すべきエピソードを伝える。それは、この弾圧・受難の時期、国王はたまたま6万ポンド必要となったが、シティが2万ポンドしか用立てることができなかったのに反し、非国教徒側は、さまざまな妨害を排して、4万ポンドを国王に提供した。そこで国王は顧問たちの反対にもかかわらず、議会召集を思い立った、ということである。恐らく、この通信の頃、国王と非国教徒の間で、臨時課税と恩赦について取引が進行していたのではないだろうか。因みに、議会報告で、マーヴェルが恩赦への期待をほのめかしたのは、この2日前(11月26日)のことであった。

庶民院については

「出席が悪く、しかも追従的」(318)と述べ、追従議員の氏名も列挙しているが、そのなかに例の利権漁りの議員の名のあることは言うまでもない。国王への追加予算は「異議ナシ」(*Nemine contradicente*)ということだったが、賛成者は少なく、沈黙によって承認されたにすぎないと言う。最後に

「オレンジ公が大いに利用されています。国王はかれに多額の借金がありま

す。」(同所)

と結んでいる。

甥への第2信(71. 1. 24; 321-22)は議員傷害事件を伝えたもので、この内容はすでにほぼ紹介した通りであるが、事件の全容が明らかにされているとしても過言ではない。前記のように、犯人たちが国王の庶子モンマス公の部下であり、現にリーダー格の人物がモンマス公邸に匿まわれていることも指摘され、市当局への報告では省かれていたモンマス公の存在が、ここでは、やや誇張して言えば、クローズ・アップされているという感さえもある。そして宮廷も、非は被害者の側にあるという態度を示しているとか、国王が逮捕された犯人の釈放を命じたとか、市当局への報告とは異なり、事件への宮廷の干渉にも言及している点が注目される。この書簡は

「宮廷は窮乏と奢侈を極め、人々は不満で一杯です」(322)

という言葉で結ばれている。

マーヴェルは甥にたいし、議会閉会直後の4月30日にも、引続き書き送っているが、そのなかで、貴族院においても、宮廷、政府を批判した議員が同僚から圧力を受けた例を紹介し、またモンマスが仲間と一緒に夜警を殺害し、共犯者たちはモンマスのおかげで全員目こぼし(pardon)となったが、「すこぶる、けしからん振舞」と憤っている(323)。この事件は市当局への報告でも触れているが

「睨いて、命乏いをする哀れな夜警」

云々(71. 2. 28; 133)とあるものの、犯人については「身分の高い人」とぼかしている。

さて甥あての第3信ではフランスとの関係に触れながらイギリスの運命をトしている。フランスはダンケルクからこちらを睨んでいる。議会は国王に80万ポンドを提供したのにもかかわらず、かれは対抗手段を講じようとはしない。

ルイ14世は「わが国に手を下そうとはせず、ただわが国が自滅するままにしておくことでしょう。じっさい、哀れな国民は、今ほど多く、複雑で、致

命的で、不治な病いに取りつかれたことはなかったのです。」(323)

イギリスにとり、眞に恐るべきは強力なフランスではなく、自己の腐敗にほかならないということであろう。

甥にあてた以上の3通と並んで注目すべき私信として、在ペルシャの友人にあてたものがある。発信は71年8月9日と多少ずれているが、内容は同じ時期の政界の腐敗を伝えるものである。

まず指摘されているのは、宮廷、政府の財政上の乱脈、無責任である。国王は国防上の理由で海軍の軍事費を請求して来たが

「結論を言えば、かれはなんら着手することがなかったのです。」(324)

国王は債務の支払いを議会に要求した、しかしながら、

「大臣たちは庶民院にたいし、その明細を決して示そうとはしませんでした。それでもわたしたち庶民院はいくつかの財政法案を通しました。ご覧のように事態はもはや正気の限りではありません・・・

だれもが予想していることですが、提供された資金も債務の返済にあてられることはないでしょう」(同所)。

このような事が罷り通るのも、利益に目がくらんで、議員たちが容易に買収されてしまうからであると、マーヴェルは議会の腐敗をも指摘する。さらにかれは議員たちを取巻く利権の渦のなかに国王の愛人がいることをも見逃していない。かれはその名をあげ、

「昇進は万事、かの女の了解のもとで行なわれています」(325)

と言う⁽³⁴⁾。

マーヴェルのみるところ

「庶民院には、もはや、ほとんど先がありません、そして国王にとっては、大変高いものにつき⁽³⁵⁾、一方、国民からはそっぽを向かれております。」(同所)

国際情勢にも触れる。フランスは覇権を窺っていると伝え、さらに

「わたしたちは、万事フランスの言いなりで、これでは同盟も名誉もあった

ものではありません。」(同所)

最近の数カ月で、フランスにたいするイギリスの従属がさらに深まったと、言うことであろうか。

以上でこの時期の私信の紹介を終るが、市当局への報告と私信、両者の内容の相違はあきらかであろう。前者が私見を交えず、簡略に会議の審議の経過を伝えているのに反し、後者は政界の実状を直視し、あえて腐敗を指摘している。マーヴェルは物事の両面を見る能力があったと言われる⁽³⁶⁾。それと無関係ではないが、かれは同一の対象について、相手により、通信の内容を変えていたということができる。市当局がかれに求めていたのは何よりも情報であり、かれの意見ではなかった。仮に意見を求められたとしても、信書の秘密が尊重される時代ではなかった。(因みに、ここで紹介した私信はすべて国外にあてられたものであった。) 宮廷についての記事、また同僚議員の行状についての言及にも配慮が必要であった。恩赦問題について、マーヴェルは宮廷と接触することもあっただろうし、利権派議員とも審議の過程で同一歩調をとることもあったに違いない。要するに市当局への通信は、その使命が優先し、またかれの政治性が貫かれている。しかし、そのことをもって、かれが曲筆したとか、虚偽の情報を伝えたとか言うことはできない。ただ眞実をそのまま語ることが、宮廷批判となる場合、事情に応じて、意図的に舌足らずの報告にしたことはあり得る。かれの議会報告は、しばしば微温的ではあったが、そのおりでも、かれの厳しい視線が政界に向けられていたことを、その私信が示している。

VII. 閉 会

議会の開閉会は国王の大権事項であり、それはむしろ国王の恣意下にあったとも言える。したがって円満な形の閉会は少ない。第7会期は司法権をめぐって両院が対立したまま閉会し、第8会期は議会の決算問題への追及をかわすため、一切、審議未了のまま、閉会とした⁽³⁷⁾。

この会期の閉会も突然のことであった。その予想を伝えたのは4月18日づけ

の書簡だったが、直前の13日づけでは、まだ恩赦について甘い期待を示している。それにもかかわらず18日づけでは、閉会の近いこと、それに伴って恩赦の見込みが薄くなったと、事態の急変を伝える。大方の意見では、課税問題をめぐる両院の対立を冷却させるための閉会で、短期であろうとされるが、一部では次の2月ぐらいまで閉会が続くとも言われていると報じ(140)、ついで4月22日には閉会を伝える。課税の擁限についての両院の対立が解決する見通しの立たないことが閉会の理由とされている(同所)。閉会のため、重要法案として外国商品への追加課税、宗教関連法案が廃案となった。なお、閉会期間は、前記大方の予想を外れ、ほぼ1年後の4月16日までとされた。議会再開が予定されているその時機にはフランスとの共同作戦によって、第3次オランダ戦争が開始されようとは、議員のだれが想像し得たであろうか。その点、ここまでは、宮廷・政府の謀略も成功しつつあったと言えようか。

結 び

騎士議会第9会期の後半は、従来同様、国王の予算要求に応じての課税審議の国会であった。また、チャールズ＝カバル政権が、本格的に事前工作に取組んで召集した議会でもあった。審議の過程を、マーヴェルの報告に沿って、課税問題、宗教問題、議員傷害問題の3つに分けて追ってみたが、最後の問題は議会にとり由々しい問題ではあったが、元来はアクシデント、その上、ハル市にとって特にかかわりのあることではなかった。報告も簡略であったのも当然かも知れない。以下、結びとして、この会期を、別の視点からふり返ってみよう。

課税審議は、概ね、順調であったと言えよう。この会期について

「気分一新、秋から冬にかけて、財政上、気前のよさが目立っていた」⁽³⁸⁾と言われるが、それは明らかに、フランスの侵略政策抑止のための三国同盟が歓迎されたことによる。政府側も同盟の盟主気取りの態度であったことはマーヴェルが報じたところであった。それと並んで無視できないのは、言うまでも

なく利益誘導による議員工作の影響である。まさに

「1670年と1671年の追加予算の票決が最初の収穫であった」⁽³⁹⁾

ことは否定できない。利益誘導の手がハル市にまでのびていたことはマーヴェルが報じているが、宗教問題も取引の対象とされ、マーヴェルもそれを拒まなかったことは、前引のマーヴェル自身の言からも疑いない。かれは潔癖ではあったが、殉教者型の人間ではなかったし、もとより、仲間に殉教を強いる人間でもなかった。なお、私信ではかれ個人も取引の対象とされていたようである⁽⁴⁰⁾。マーヴェルは課税がほどほどで (moderate) あることを願いながら、非国教徒のため、ハル市の利益のために、ある種の課税を推進するディレンマに立たされていたように思える。

ところで、国王から巨額の臨時予算を求められた議会は、新しい財源を発見しなければならなかった。その結果、この会期は税制史上、剛期とされていることは既述の通りだが、この評価を裏づける史料として、マーヴェルの議会報告 (70. 12. 15) もあげられていることを⁽⁴¹⁾、ここで特記しておく。

議会は単に新しい財源を開拓したばかりではなかった、課税に一定の方向性を持たせるようにもなった。すなわち本文中で指摘した重商主義路線である。重ねてチャンドマンの言を借りる。

「1670-71年は貿易差額についての議会の態度の転換点となった年度であった。これまでは財政的関心と貿易上の関心は、一般的に、並進状態であった。しかし以後、両者の分岐が著しくなった。」⁽⁴²⁾

「庶民院における重商主義的主張は、それ自体、1670-71年にかけて、すこぶる顕著であったが、チャールズ治世の次の70年代を通じて、それは執拗にくり返されることとなった。」⁽⁴³⁾

マーヴェルもまた、この重商主義派の一員であったことは疑いないが、重商主義派即反宮廷派とみるのはいささか性急であろう。確かに宮廷派が苛立ったように、重商主義派の課税の選択は、課税促進の妨げにはなっただろうが⁽⁴⁴⁾、調達目標額そのものを否定しているわけではなく、ことにマーヴェルのように、

宗教問題上、課税に協力せざるを得ない議員が重商主義派には多かったと思われるからである。

以上のように、この議会の重商主義路線を反宮廷的とは断定し難いが、それが反フランス的であったことは明白である。反フランスの姿勢は今までの議会でも示されたが、この会期ほど顕著ではなかった。課税の対象に奢侈品を始め、フランスからの輸入品の多いのも決して偶然ではない。むしろ反フランスの意識の高まりが重商主義的な課税を導いたとも言えよう。しかし反フランスはそのまま、親オランダを意味するものでもなかった。三国同盟の歓迎は国防上の見地からであり、デ・ウィット政権や共和政にたいする警戒心は依然強かった。マーヴェルの書簡で、オランダに触れているのは、オレンジ公と海運業についてだけである。海外通のマーヴェルにしては国際関係について意外に寡黙である、これは議会の討論状況を反映するものであろう。要するに、この会期、対外意識については反フランスは明確であったが、オランダにかんする意識は、まだ流動的であったと思われる⁽⁴⁵⁾。

この会期が、第7会期と同様、両院の対立のため、審議途中で閉会となったことも注目すべきことである。第7会期においての司法権をめぐる対立は、国王の裁定により、庶民院に有利な形で解釈したのは、第9会期の冒頭（70年2月）であったから⁽⁴⁶⁾、以来僅か1年余で対立が再燃したことになる。しかし庶民院の用意した課税案のひとつが、国王お膝元の貴族院の強硬な態度によって、結局廃案となったのも皮肉である⁽⁴⁷⁾。国王は貴族院の態度についてバッキンガムを叱責したと言われるが⁽⁴⁸⁾、もっともなことである。また閉会にかんしては閣内で意見が一致せず、閉会を勧めたアーリントンは同僚から非難されたようである。だが、閉会の何よりの原因は、財政にたいする議会の迫及的な態度に国王が立腹したことにあるとも言われる⁽⁴⁹⁾。わたしはこの見解を支持する。いずれにせよ、この閉会措置は、宮廷・政府の敗北と見られている。カバルの議会工作の限界を示すものと言えよう。

他方、マーヴェルにとっても厳しい会期であった。開会直後、野党の仲間の

「転向」を目の当りにしなければならなかった。穏便な課税を願いながらも、非国教徒にたいする規制の緩和や恩赦という餌を無視することはできなかったはずである。宮廷や同僚議員への不信感を抑えながらの課税審議への協力であった。突然の閉会をむしろ冷静に迎えている。恩赦の期待の空しくなったことを含め、ビジネスライクの態度で伝えている。これは、第8会期が国王の恣意によって閉会されたことを報告した時⁽⁸¹⁾とは対照的である。市当局への報告とは裏腹に、宮廷・政府への不信から、見極めを抱いていたことにもよろう。マーヴェルの国王・政府への不信の一因は、私信が述べている、宮廷のフランス追従の姿勢であったが、それが決してかれの杞憂でなかったことは、議会閉会の1年足らず後、フランスと協力して第3次オランダ戦争を始めたことで裏書きされる。しかし三国同盟に反するドーヴァの密約の履行によってカバル政権は自らの墓穴を掘ることにもなったと言えよう。あるいは自己の奇計に溺れたと言うべきか。カバル政権の崩壊(73年秋)をマーヴェルがいかなる感慨をもって迎えたか、それを問うことは、さし当り本稿の課題ではなく、また著しく困難なことである。当初触れたようにこの後3年間、かれの政界通信は公私ともに見当らないからである。ひとまず、ここで搁筆する。

注

- (1) 拙稿(1996)。表題等については文末一覧を参照、他も同様。
- (2) Coward, 530では第12会期となっているが、ここではHolmes, 424による。
- (3) Margoliouth, II, 365によると、報告は続けられたが、紛失したと推定される。
- (4) したがって、マーヴェルの報告を通して、戦況や、73年の政変の様子を知ることができない。
- (5) 書名等については、文末一覧参照。なおこの訳書については、『西洋史学』183号(1996)所収の拙稿を参照。
- (6) テキストは第II巻に当たるが、以下引用の場合、IIを略す。
- (7) 以下、前稿の一部と重複している。
- (8) ジョン・ロックの『市民政府論』(1689)においても、連合権(外交権)は独自の立場を与えられている。147節参照。
- (9) 前掲拙稿、19参照。

- (10) Holmes, 434.
- (11) Rowen, 731.
- (12) Raleigh, 191seq..
- (13) ヒルによると, “Cabal” とは実にマーズェルの造語とされているが, わたしはまだ確認していない。Hill, 326.
- (14) Greaves, 151seq..
- (15) Ibid., 163.
- (16) 三国同盟が初めて提起されたのは68年2月の議会においてであった。そのおりも, 今回も, マーズェルは議会の反応について具体的に述べていないが, 参考までに次の記述を紹介しておく。
- 三国同盟は「議会でも, 国内でも広く, 熱狂的に歓迎された。というのも, フランスが早急かつ簡単にフランドル地方に侵入したことにより, 恐慌が広がっていたからであった。世人の多くは三国同盟を確固たる態度と評価し, 必要があれば, 軍事力を行使しても, ルイ14世が隣人を支配することを阻止すべきである, と考えた。」 Jones, 95.
- (17) すでに会期の前半には40万ポンドを提供している。
- (18) この時期の政府側の情報活動についてのMarshallの書では, 1回だけであるが, アーリントンとの関連で, マーズェルに言及している。62.
- (19) この件について, 可決した前便では, 主語は‘we’で, 今回の否決の主語は‘the house’である。マーズェルは意識的に使い分けたのだろうか。
- (20) Chandaman, 165.
- (21) これまでは委員会においての法案作成の審議であった。
- (22) 同じ件が, 委員会では103-96で票決されたことを, 70. 12. 15に伝えている (122)。
- (23) 拙稿 (1996), 35参照
- (24) 言うまでもなく, 名譽革命後イギリス国王ウィリアム3世となった人物である。母はチャールズ, ジェイムズ両王の姉妹に当るが, ウィリアムは幼くして孤児となり, イギリス人の同情を集めていた。その上, オランダ政権はオレンジ家の声望を警戒して, かれを冷遇したため, イギリス人の不満を買った。同盟関係にあるとは言え, 両国の不信の火種は残っていた。
- (25) マーズェルは以前, 私信のなかで, 集合法を「臨時課税の代償」と呼んだことがあるが (70. 3. 21; 315), 今回はその逆のことが実現する可能性があったことになる。
- (26) 4月18日の書簡には, もう一点, 興味深い報告がある。
- 「こちらでは目下, 進行中の問題があります。議会によってではなく, 陛下の思召しによって, ハルを自由港にするということで, 陛下のご意向というわけです。」 (140)
- 政府が, 八方手をつくして, 懐柔に努めている様子が示されている。
- (27) Miller, (1973), 87.
- (28) Seaward, 63.
- (29) これと並行して, 亡命ユグノーの処遇も話題となる。70. 12. 3の書簡では, 帰化法案

の上程が伝えられる (120)。

(30) Miller, (1973) ,107.

(31) この件の審議中に、次のような発言もあった。

「ギリシャ人やローマ人は、奴隷が不具にされたり、傷つけられた場合、それは主人にとり不名誉なこととした。ましてや自由人、人民の代表が、このように傷つけられるということは、一層恐るべきことである。」 cit.G.de F.Lord,168.

(32) マーヴェルはこの事件の後日談として、私信のなかで、現場を指揮した2人が、結局、出頭しなかったことを伝えている。(71. 8. 9 ; 325)

(33) ウィリアム・ポップル (W.Popple,1638-1708) だが、マーヴェルの姉の息子で、当時ボルドーでワインの取引に従事していた。後年、ジョン・ロックの『寛容論』(*Epistola de Tolerantia*) の英訳者として知られる。

(34) ハリファックスは、チャールズ2世の回想のなかで、愛妾たちについて一節をさき、その存在は宮廷において些細なことではなかったとし、最後の愛妾にふれ、「かの女の部屋は眞の意味での閣議室であった」と述べている。Raleigh,195.

(35) 利益誘導による政界工作から「たかり」が常習化して来る。「男女の物乞いのおかげで、かれ(王-引用者)の金庫はからになった」とハリファックスは述べる。Ibid.,203.

(36) Hill,328.

(37) 拙稿、参照。

(38) Holmes, 7.

(39) Ibid.,112.

(40) 私信でアイルランド赴任の可能性を伝えている (71. 4. 30 ; 323)。もちろん、実現しなかった。なお、当時、議員は官職を兼務できた。また国教会を批判したマーヴェル(匿名)の*The Rehearsal Transposed* (1672) は国王の保護を受けている、Legouis,144-45.両者の宗教的「連帯」が続いていたということか。

(41) Chandaman,165,fh., 1.

(42) Ibid.,16.

(43) Ibid.,17.

(44) 新しい税は「歳入に適するものに課されず、むしろそのようなものは対象外とされる」といふはやきもあった。Ibid., 43.

(45) フランスとの共同作戦の第3次オランダ戦争(1672-74)は、国王の議会にたいする「公約」違反とも言うべきものであったが、議会はシャフツベリの呼掛けに応じて、戦費の追加を承認している。根強い反オランダ意識のあらわれと言えよう。開戦前後の対外意識については、Pincusの論文を参照。

(46) 拙稿、II, IV参照。

(47) この問題における貴族院の態度については、cf.,Haley,289seq..

(48) Miller, (1991) ,185.

(49) Ashley,181.

(50) Miller, (1991), 185.

(51) 拙稿, 33.

文献一覧

本稿で引用・言及したものに限る。

Ashley, M., *Charles II The Man and the Statesman*, Panther Books, 1973.

Chandaman, C. D., *The English Public Revenue 1660-1688*, Oxford, 1975.

Coward, B., *The Stuart Age: England 1663-1714*, 2nd Ed., London, 1994.

Greaves, R. L., *Enemies under His Feet Radicals and Nonconformists in Britain, 1664-1677*, Stanford, 1990.

Haley, K. H. D., *The First Earl of Shaftesbury*, Oxford, 1968.

Hill, C., *Puritanism and Revolution*, Penguin Books, 1990.

Holmes, G., *The Making of A Great Power Late Stuart and early Georgian Britain, 1660-1722*, London, 1993.

Jones, J. R., *Britain and the World 1649-1815*, Fontana PaperBacks, 1980.

Legouis, P., *Andrew Marvell Poet · Puritan · Patriot*, Secoud Ed., Oxford, 1968.

Locke, J., (鵜飼信成訳), 『市民政府論』, 岩波文庫, 1985.

Lord, G. deF., (ed.), *Poems on Affairs of state Augustan Satirical Verse, 1660-1714 Vol. I: 1660-1678*, New Haven, 1975 repr..

Margoliouth, H. M. (ed.), *The Poems and Letters of Andrew Marvell*, 3rd Ed., Vol. II · *Letters*, (revised by Pierre Legouis with the collaboration of E. E. Ouncan-Jones), Oxford, 1971.
本稿の史料である。

Marshall, A., *Intelligence and Espionage in the Reign of Charles II, 1660-1685*, Cambridge, 1994.

Miller, J., *Popery and Politics in England 1660-1688*, Cambridge, 1973.

——, *Charles II*, London, 1991.

Pincus, S.C.A., “Republicanism, absolutism and universal monarchy: English popular sentiment during the third Dutch war”, MacLean, G. (ed.), *Culture and Society in the Stuart Restoration*, Cambridge, 1995.

Raleigh, W., (ed.), *The Complete Works of Georg Savile First Marquess of Halifax*, New York, 1970repr..

Rowen, H., H., *John de Witt*, Princeton, 1978.

Seaward, P., *The Cavalier Parliament and The Reconstruction of The Old Regime, 1661-1667.*, Cambridge, 1989.

吉村 信夫 (訳・著) 『マーヴェル書簡集 王政復古時代イングランドへの窓として』 松柏社 1995.

- 拙稿 「マーヴェルの選挙区への書簡 (3) 1668年-1670年」『富山大学経済学部富大経済論集』 第41巻第3号 1996.
- 書評 吉村 信夫(訳・著)『マーヴェル書簡集 王政復古時代イングランドへの窓として』 『西洋史学』183号 1996.

頁	行	誤	正
74	14	3. unixのアカウント管理と認証	3. unixのアカウント管理と認証
84	表1 「適用業務」行の 「経営情報システム」欄	・ 要 <u>的</u> 報告書	・ 要 <u>約</u> 報告書
166	17	委員会に付 <u>記</u> された	委員会に付 <u>託</u> された
186	15	Secoud Ed., Oxford,	Second Ed., Oxford,
”	31	<i>The Complete Works of Georg</i>	<i>The Complete Works of George</i>